

附属図書館セミナー「大学図書館の学習空間と学修支援 —世界・日本・信州の事例から—」開催報告

濱 田 祐 次 （信州大学附属図書館 農学部図書館）

1. はじめに

信州大学附属図書館では、2017年10月13日（金）に附属図書館セミナー「大学図書館の学習空間と学修支援—世界・日本・信州の事例から—」を開催した。以下、セミナーの詳細を報告する。

2. 本セミナーの主旨・概要

本セミナーは、フランスのパリ・デジタル大学所属の John Augeri 氏を講師に迎え、空間と人的支援を中心とした日仏の事例から、今後の大学図書館の学修／学習支援のあり方について考えることを主旨として企画された。フランスのパリ・デジタル大学設立メンバーである John Augeri 氏は、2006年に17大学で始まった高等教育におけるオンラインサービスの開発を主な活動とする公的コンソーシアムで、ファカルティ・ディベロップメント、革新的な学修空間の活用を、戦略策定と実践の両面から推進している。現在は、学修空間の研究を集中的に行っており、これまで日本を含む世界の60大学を訪問調査している。本セミナーでは、効果的な空間づくりを行うための重要な観点について、各国の事例紹介を交えながら講演いただいた。

また附属図書館側からも、2015年にリニューアルした中央図書館の取組状況について、各学修空間や学修支援サービスの利用動向について、統計を元に事例報告を行った。

当日は講演前に Augeri 氏を迎え、各図書館の学修支援サービスの活動状況などをトピックにランチタイム・ミーティングを行った。その後、共同学習スペースをはじめとした増築部分の様子などを中心に、中央図書館内を案内した。

以下、事例報告と講演の内容について詳述する。

3. 中央図書館の事例報告

まず初めに、中央図書館図書館サービスグループの後閑壯登氏より、信州大学附属図書館でのグループ向けの学修支援空間と学修支援サービスについて、各図書館の概況と中央図書館での事

例報告があった。

中央図書館では「学生の居場所を増やすこと」を目指し、「閲覧・学習スペースの拡大」「会話・飲食可能なスペースの設置」「グループ学習室の整備」を中心に、2013年8月から2015年6月の間増改築工事を行った。リニューアル・オープン後の利用傾向を見てみると、2016年度には入館者数が改修前（2012年度）の10%増となった。また、飲食可能なラウンジ的空間（1F増築部）に多くの学生が集まる傾向にあることが、在館者統計から見てとれた。

以下、具体的な利用状況・利用動向の報告について述べる。

3-1. グループ学習室

館内にはグループ学習室が全4室あり、学生自身によるWeb予約で運用をしている。ログデータから利用時期の傾向を見てみると、7月や12月等、試験準備のための利用が多く見られた。利用層では、医学部生や隔地学部1年生が多数利用していることが分かった。

また、利用目的について見てみると、1年生向けの共通教育での利用が多く、授業内のグループ活動が含まれる課題での利用が中心である。また、2年生以上では医学部の利用（国家試験対策、症例検討会など）が多く見られた。ゼミ目的の利用では経済学部の利用が最も多かった。

3-2. ラーニングアドバイザー

つづいて、中央図書館での学修支援の取り組み状況について報告があった。

まずラーニングアドバイザーについての報告があった。ラーニングアドバイザーとは、学生の学修上の相談に大学院生が対応し、サポートを行なうサービスである。2017年度は6人体制・週5日に対応、数学・化学などの専門科目の相談の他に、参考文献探しやPC操作のサポートなども行っている。

学部・学年単位の統計から利用の傾向を見てみると、アドバイザーへの相談内容では理系基礎科目（数学・化学等）の相談が最も多く、利用学年は1年生が約90%を占めている。また、2年次以降松本キャンパス以外の隔地学部へ行く学生からの相談が70%近くあった。理由は、「1年生のうちに単位をとって隔地のキャンパスへ行かなければならない、というプレッシャーが関係しているのではないか」とのことだった。

3-3. ライティングセンター

もう一つの学修支援として、ライティングセンターの取り組みについての報告があった。このサービスは、1年生向けの共通教育科目「大学生基礎力ゼミ」と連携し、課題レポートの指導を実施するものである。前年度のゼミ受講生のうち、担当教員の推薦を受けて優秀な学生を指導員として採用し、その先輩学生が指導を行う、というピアサポートの形式をとっている。

また、ライティングセンターの活動の一環として、基礎力ゼミ受講生以外も対象とした「レポー

トの書き方講座」も年4回開催している。2017年度前期参加者数は、のべ566人であった。

3-4. 今後の課題

最後に、今後の課題について述べられた。まず「指導学生」の人材確保が課題となっている。現在ラーニングアドバイザーの需要が理系科目に集中しているため、人材が理系科目の大学院生に偏ってしまう傾向にある。その対策として、今年度から医学部生からの採用を試行している。また二点目として、ライティングセンターのサポートメンバーに松本キャンパス以外の学生が選ばれた場合の、隔地学部との兼ね合いの問題が残っている。こちらは現在対策を検討中である。

また、全学的な支援体制整理にむけて、1年次に中央図書館を利用した後隔地学部に進学する学生のために、各学部図書館での学修支援の環境を充実していく必要がある、と述べられた。

4. John Augeri 氏による講演

つづいて John Augeri 氏より、効果的な学習スペースを構築するために重要な観点について、世界各国の大学への訪問調査に基づいて定めた基準／指標をもとに、様々な事例を交えながら講演いただいた。

近年、学習スペース（Learning Space）は常に進化・変化しており、非常にエキサイティングなトピックとなっている。学習スペースと一言で言っても、そこには「（ラーニングコモンズなどの）共同スペース」「講義室・教室」「図書館内の学習スペース」などの広範囲な意味合いを含んでおり、どのような学習スペースを設置するのか、各組織の目的に合わせた構築の計画を立てていく必要がある。

そこで Augeri 氏を中心に、北米・ヨーロッパ・アジア・オセアニアの4つの地域における各国の大学を訪問調査するリサーチ・プロジェクトを立ち上げ、それぞれの学習スペースの状況について国際比較を行った。その際に、基準／指標とした各項目について具体的な事例を挙げながら紹介された。以下、主要な項目について述べる。

4-1. インテリアとレイアウト

まず、学習スペースに設置するインテリアとそのレイアウトなどの「デザイン」の側面から見た事例の紹介があった。

シンガポールのある大学の学生に対して、「どのような学習スペースが必要か」という質問したところ、半数近くが「自分達の所持するPCなどの電子機器が充電できる場所」と答えた。また、（コーヒーショップに集うような）快適で飲食ができる場所として共同スペースが必要である、という回答も多数あった。ここから、学習者たちが「基本的な」空間・設備を求めていることが明らかになった。

その中でどのようなインテリアが必要かについて、例えば「可動式か／固定式か」という観点から各国を比較すると、日本は比較的「可動式」のインテリアを選択しており、欧州、アメリカの順でより「固定式」のものを導入する傾向にあった。確保可能な空間の違いや文化的背景の差も関係している、と述べられた。

近年の傾向は、固定式から可動式へとシフトしている。しかし可動式のインテリアを導入した大学では「可動式であるにもかかわらず利用者が動かそうとしない」ことが問題となっており、その対策としてある大学では「動かせます」という印刷・掲示をして利用の促進を図っている、という事例も紹介された。

また、魅力的なレイアウトをつくるためには「3Dで考える」ことが重要であると述べられた。各エリアの性質・目的・用途に合わせ、異なる高さのインテリア（ソファ、ローテーブルなど）を選択することで、エリアごとの特色を際立たせることが可能になることが、いくつかの大学図書館を撮影した動画で紹介された。この点は後述する「ゾーニング」とも関わってくる。

4-2. テクノロジーとツール

つづいて、学習スペースに設置する機器のテクノロジー（ハイテク／ローテク）という観点について、ホワイトボードを例に挙げて説明された。「手書き」と「電子化した」ホワイトボードの場合、どちらを選ぶかについて各国の大学で調査をしたところ、ほぼ100%「手書き（ローテク）」の方を選ぶことが分かった。電子化したハイテクの機器は操作が複雑で難しいから、という理由による。

ここで、州立ワシントン大学の機器設置の興味深い事例が紹介された。同大学では学習スペース内の各テーブルに設置された液晶ディスプレイの表面にマーカーで書き込みのできるガラス板を取り付けた、「ハイテク」と「ローテク」両方の性質を効果的に組み合わせた複合的な設備を提供している。このようにローテクの要素を意図的に取り入れる傾向は日本の大学でも多く、それは財政的な理由だけでなく「共同」で何かをする場合にローテクであることがより効果的であることを示している。

また、学校側がハイテクな機器を用意するのではなく、「機器自身は利用者が持ち込む」ことを想定してデザインすることも1つの手段である。

このような事例から、「可動式か／固定式か」「ハイテクか／ローテクか」という指標自体よりも、それらが「効果的に機能しているかどうか」について考え、より良い学習スペースを提供していくことが重要である、と述べられた。

4-3. ゾーニング

学習活動の目的に合ったインテリア・設備などを使い分けてデザインするために、どのように空間を分けているか（ゾーニング）が効果的な学習スペースづくりにおいて重要な指標となる。

事例として紹介された大阪国際大学のラーニングコモンズでは、低めの家具で構成された「インフォーマルなゾーン」、閉じた空間での学習が可能な「グループ学習ゾーン」、そして「個人学習のためのゾーン」に区分けされていた。

印象的だったのは、上記共同学習スペース内の「どのゾーンに利用が集中しているか」を調査するために、1日の利用者の動きをタイムラプスで撮影したところ、個人学習ゾーンの利用が相対的に少ないことが判明した点である。その理由を利用者に質問してみたところ、「学習スペースは人と「共同の」活動のために利用するため。個人的な学習のときは他のスペースを使う。」という回答があった、とのことだった。

4-4. 政策・戦略

つづいて、学習スペース構築の際の「政策・戦略」的な側面について、3つの観点から各国の事例を交えながら説明された。

①動機：なぜ学習スペースを設置するのか

「動機」の観点から各国を比較してみると、日本とフランスはトップダウンの構想（日本の場合は文部科学省）からスタートしている点で似ており、対してアメリカなどの場合は大学自身が率先的に構想を先導していることが見てとれた。

②タイプ：どのような学習スペースを構築するのか

各国共通してアクティブ・ラーニングスペースでも講義室のようなフォーマルなスペースでもなく、インフォーマルな学習スペースに人気がある。学習スペース内にキッチンが実装されているシドニー工科大学や、足を乗せることのできる低いテーブルを設置しているワシントン州立大学などの非常に興味深い事例も見ることができた。

③ロケーション：キャンパスのどこに学習スペースを設置するのか

1つの建物内にすべての学習施設を統合した「集約型」と、キャンパス内の異なる建物内にそれぞれの学習スペースを設ける「分散型」という2つのタイプに分けることができる。集約型の場合は、「大学のランドマーク」としての機能も有することが可能である。対して「分散型」の場合は、各建物の性質（学部の特色など）に合わせた学習スペースを構築することができる、というメリットがある。キャンパス自体が分散している信州大学のような場合は「集約型」は難しく、2つのタイプを組み合わせたハイブリッド型となるだろう、との指摘があった。

4-5. 競争

さらに、学習スペースを構築する上で、対内／対外的競争（特に対外的な競争）の有無について考える必要がある。この観点から3つの地域を比較してみると、アメリカの場合はフォーマル／インフォーマル／プライベート全ての空間が大学内に存在しているため、外部との競争の問題が起きることが少ない。対して欧州や日本では、大学はフォーマルな学習エリアであり、イン

フォーマル／プライベートな空間は「自宅」がその役割を担っていることが多い。さらに日本の場合はインフォーマルな学習場所として、自宅の他に「コーヒーショップ」も対外的な競争相手となっている、と述べられていたのが印象的であった。

欧州や日本のようなタイプの場合は、学生たちをキャンパスに留めるために、上記「競争相手」に負けない「魅力的なデザイン」を提供する努力が必要となる。例えば 2017 年 4 月にオープンした神田外語大学の学習スペースは「スターバックスのような空間を」というコンセプトのもとで設計のリクエストをした、とのことだった。

また図書館の場合、従来のサービスに加えて IT サポートサービスや学習アシスタント、映像編集のためのスペース、プレゼンテーション・エリアなどの「新しいサービス」を提供することが重要であると述べられた。

4-6. 評価の指標・指針

最後に、学習スペースを構築・評価するための指標・指針について、有用なツールを 2 つ紹介いただいた。

① FLEXspace

<http://flexspace.org/> (2018 年 1 月 25 日アクセス)

EDUCAUSE が提供するオンライン・データベース。学習スペースの構築の仕方について、様々な機関の事例を見ることができる。

② LSRS (Learning Space Rating System)

<https://www.educause.edu/eli/initiatives/learning-space-rating-system> (2018 年 1 月 25 日アクセス)

学習スペースの評価システムを記載したガイドライン・ブック。スペース構築の際の指標としても用いることができる。今年度、Augeri 氏と大阪大学の浦田悠氏の共同翻訳・翻案による日本語版が刊行された。上記サイトからダウンロード可能である。

5. おわりに

項目 3-4. で述べたとおり、全学的な支援体制整理にむけて、各学部図書館での学修支援の環境を充実していくことが信州大学附属図書館の今後の課題である。本セミナーを通して、各学部図書館での学修空間の構築と学修支援サービスのより一層の充実を図る上で、有用な指標・基準となるような評価の観点を知る大変貴重な機会を得ることができた。